

JSC-17報告*

住 明 正**

第17回の JSC (Joint Scientific Committee)が、フランス気象局の気象研究所などの施設が存在するフランス、トルーズで、1996年3月11日から16日にかけて開かれた。トルーズは、フランスの宇宙機関の CNES や、エアバス社があるハイテク市であるが、街自体は、南仏の由緒ある街であった。

会議は中国の Zeng と日本の Yamagata 両氏の欠席の下で始まった。会議の詳細は、いずれ、WCRP 事務局から公式の報告書として出版されるので、全体を忠実に再現することはやめ、筆者の印象に残ったことを中心に記すこととした。

会議の前日の夕方に、NOAA の K. Mooney, ブラジルの A. Moura, GEWEX の P. Try, CLIVAR 議長の K. Trenberth 達と夕飯を食べた。何故、K. Mooney が来ているのか、疑問に思ったが、どうも IRI (International Research Institute) の件で国際的な根回しに来たらしい。とにかく、長年の懸案の IRI が先週の月曜日に最終的に決着したということで、Ken (Mooney) はすごく興奮していた^{*)}。「NOAA の長官の J. Baker の部屋で、M. Hall が (どの場所を選ぶ

か) 最終報告した後、Jim (Baker) が勝者に Mike (Hall) が敗者に電話をした」と話す口調には、決定的瞬間に立ち会ったという興奮がみられた。1989年以来、彼らのためめぬ (しつこいくらいの) 努力を良く知っている筆者には、その感慨は理解できるものの、外側の人間から見れば、「何を独りでいい気になっているのだろう」という目で見られているであろう事は、容易に想像がつく。事実、JSC での Ken の説明に対しても、全体としては、しらけた雰囲気であった (潜在的に他の国はアメリカの独走を苦々しく思っている感情がある)。

WCRP 全体の構造については、前回の JSC の方針、基本的に関連する分野と協調して行く、ということが踏襲されていた。とりわけ、今回は、「Climate Agenda」が強調されていた。これは、気候関連研究に各国政府の支援を要請する計画で、(1)気候科学及び気候予測のフロンティア、(2)持続的な成長のための気候情報、(3)気候影響評価の研究及び適応戦略、そして、(4)気候システムの観測の4つが大きな柱になっている。WCRP は、これらの目標に密接に関連しているので、WCRP に対しても、各国政府から援助を得よう、ということである。この Climate Agenda は、WMO の総会や、UNEP, ICSU そして IOC の総会で基本的に承認され、FAO でもこの秋に承認される予定とのことである。

* Report on JSC-17.

** Akimasa Sumi, 東京大学気候システム研究センター。

© 1996 日本気象学会

^{*)} IRI は、ITB (International TOGA Board) で、ENSO の予測を行う国際機関が必要という勧告の下に研究されていた国際的な予測センターのことである。とはいえ、実態は、NOAA の研究部門が独自の予測センターを樹立したいということで、当然ながら、NMC が反対し、NOAA 内部での権力闘争が長く続いていた。この暗闘は、そこから見ても憎悪丸だしの凄いものであった (もっとも、そういう感情を出すのは K. Mooney だけで、M. Hall などはさすがに冷静であったが)。一時は、ほとんど絶望と見られていたが、長官が J. Baker になって巻き返しが実り、95年秋のワシントンでの国際ワークショップの開催、そして、今回、IRI のコアセンターとしてのアメリカの投資分の公募が行われたのである (IRI は原則として国際センターであり、そのコア施設も国際的な合意で設置される。それ故に、アメリカの一存で決めるわけには行かない、という建前を守っている)。その公募には、経済的不況が進行しているので州政府を巻き込んだ誘致合戦が行なわれたが、最終的にラモントースクリプス連合、フロリダ州立大、ハワイコーラ連合の3者が立候補し、ラモントースクリプス連合に決着した。

2日目からは、WCRPの各種のサブプログラムの報告が行われた。GEWEXの報告でChahineから行われた。陸面状態の改良によって予報が改良されたという最近の成果などを強調していた。また、全球土壌水分プロジェクトに関するSato and Nishimura (1996)などの結果を引用して成果を強調していた。一般的に、GAMEの評判が良く、宇宙開発事業団のADEOSシリーズやTRMMなどの衛星ミッションを始めとして日本の寄与がかなり重要な位置を占めつつあるとの感じを得た。

SPARCについては、Chanineが出てきて報告をしていた。SPARC Officeの維持に関しては、フランスの支援が引き続き得られたことが報告された。このような話になると、日本は何も支えていないので肩身が狭い。だから、「今度はGAMEのofficeは日本で維持する」ということにしている。その他、SPARCの各コンポーネントの話をしていて、日本でもSPARCのプロジェクトが立てられた、との報告があった。(科学技術庁の振興調整費による)。

CLIVARに関しては、科学プランが出来たこと、ハンブルグに事務所を持ったことなど一通りの報告がなされただけで、次は実行案づくり、ということであった。

3日目は、WGNEとWOCE、それに、TOPEX/POSEIDONの話であった。WGNEの活動は、ますます多岐にわたり、また、各プロジェクトのNEGとの関係が議論されたが、結局、まとまらず、NEGの議長のWGNEへの出席が要請されただけに留まった。(モデリングという側面でWGNEと各NGGは共通するという主張がある一方、現在のWGNEは数値予報という線でまとまっているので活発に動ける、という反論がなされた)。気候システムを考えれば考えるほど、各種システムが関与し、色々な分野と共同せざるを得ず、研究する時間よりも会議の時間が多くなると言った悲劇が生じることになる。どうしてよいか、ジレンマではある。

WOCEに関しては、少し、紛糾した。特に、海洋データの4DDAに関してどこの機関が行うか、不明確であ

る、という点がWOCEのグループに対してのコメントである。アメリカの海洋学者は、operationalな機関を信用しておらず、研究で行うには仕事量が多すぎる、という問題の性質が、事柄を複雑にしている。とにかく、海の問題は難しい。

TOPEX/POSEIDONの話は、印象的であった。燃料が意外ともって99年までデータが入る予定であるとは意外な話であった。十分な研究の積み重ねの上にあることを痛感した。高度計のミッションと関連してgravity missionが非常に重要であることを始めて知った。

4日目には、Santerの温暖化のdetectionのセミナーがあった。「精度の悪いモデルによる不確かな結果から如何に確からしい結果を導き出すか」という努力のように思われた。Santer自身は、誠実そうな人のようで、現在提起されている問題に対して出来る限り誠実に対応しよう、としているのであろう。IPCC報告の第8章に関して、非難の対象になっていることなど考えると、「偉いものだ」と感心する。

最終日は、HDPの代表(事務局長)が、とうとうとHDPの意義を述べた。なかなかと熱弁であったが、一般的に人間社会との関わりが重要と言うだけであまり印象には残らなかった。最後に、懸案のWCRP Newsletterの発行が、GrasslとGatesの2人が原稿を書き、気候システム研究センターが費用を負担する、ということで発刊が決まった。「IGBPのように立派なニュースを出しても大して効果がない。お金がない。一方、事務量は膨大だ」と事務局員の抵抗にあい何回も流産した案件であったがやっと決まった。JSCの議長とWCRPの事務局長が主張しているにも拘らず結局自分たちがするしか実行できない、つまり、官僚組織は新規の事項には抵抗するものだということが洋の東西を問わず存在するのだということがよく分かった。次回の開催場所についても、Gatesは(意義を考えて)開発途上国で開きたい(具体的にはインド)と主張したが、事務局員その他大勢の人が「運営が大変だ」とかなんとかの事務的な理由で反対がありトロントに決まった。